

波瀾万丈の工学博士

佐久間順三

朝倉幸子◎TH-1

illustration: Taco

■ 特待生

香川県で風呂屋を営む家の、次男として育った構造家の佐久間順三さん。大学受験のときに、父親に将来を問われて思いつきでこう答えた。サクマだから「佐久間ダムのようなのをつくる人になる」と。「それじゃ日大の建築学科だ!」と即答する父。その当時は意匠の早稲田、構造の日大といわれていたので、当然のように構造に進んだという。半信半疑ななりゆきで入った日本大学だったけれど、1年生で見事特待生に選ばれ卒業まで学費免除になった。近所で自慢の孝行息子になったのでした。

元来勉強好きだから本を読み一心に建築を学んでいた佐久間さんだった。が、想像もしなかった出来事に巻き込まれる。1968年4年生のとき日大紛争が勃発して、正義感に満ちた優等生の佐久間さんは理工学部闘争委員会の委員長に担ぎ上げられる。強い思想があって始めたことではなかったが、突進型性格の青年は、それからマルクス、レーニンが愛読書になり、バリケードに立て籠もる日々を送ることに。結局、紛争の終結とともに、さらに大学4年生をするという辛い思いをして卒業。同時期に文通友達だった倉敷の女性と結婚したのでした。「神社の宮司だった義父に、学生運動をしているなら娘はやれないと迫られたのですよ」と苦笑いする。紛争で知り合った吉本隆明さん（詩人、評論家）に結婚の相談し、アドバイスを受けたというからドラマのような青春時代です。

■ 工学博士

大学に残ることもできずにいたが、初めて設計の仕事が舞

い込んで、組織設計事務所勤務の友人と3人で設計事務所【アトリエDEC】を起業する。その施主とは偶然が重なり、埼玉県久喜市にある現事務所隣の土地を入手した。設計して自邸を建てたら『住宅建築』（建築資料研究社）に掲載されて活躍の場が増えて、意匠設計と構造設計の「設計工房佐久間」へと地盤を固めたのでした。その第1号の施主が、現在久喜市の市長をされているというから縁は広がっているようだ。久喜市中央公民館など公共の建築物も設計するが、木造住宅耐震補強の設計実績や耐震診断の技術者としての講演会も数多い。

その耐震補強の事例をまとめた論文で、65歳で工学博士を取得した。自身が長年積み上げた実務でのデータを基にした論文『既存木造住宅耐震補強の費用対効果の試算』だ。保険会社などのしがらみもなく、着地点が純粋だから耐震補強にかけた費用と効果の説明は分かり易い。学位を取りたい思いは長年あったというが、いよいよ実行に移すときに、東北大学の柴田明德教授の門を叩いた。教授が退官間近であることから宇都宮大学の入江康隆教授を紹介された。実はすでに旧知で、それから3年の学究生活においては感謝しているという。

建築技術から出版した『佐久間順三流SUISUIわかる木造住宅の耐震診断・耐震補強設計・補強工事の勘所』（2017年）で一般技術者向けに論を展開されている。

覇志堂も知る建築家で建築評論家であった宮内康さん（1939～1992年）を尊敬している。『怨恨のユートピア・宮内康の居る場所』（れんが書房新社、2000年）

を開きながら、「こうさん」と語りかけるように傾倒している姿を見せる。東京大学時代から学生運動に加わった活動家としても、佐久間さんには大きな存在の人だったのだろう。

事務所のブログを開くと佐久間所長が描いた四国八十八ヶ所のスケッチ。愛妻については出会いの時の話だけを語った佐久間さんだが、その目は愛おしさに溢れているのでした。

